



視点

“あの”北海道旭川市という街で

“あの”北海道旭川市。そこは、女子中学生性的いじめ凍死事件があった街。神居大橋から突き飛ばされ亡くなった女子高校生殺人事件があった街。ここ数年でSNS上ではすっかり“魔境”認定されている旭川市と、その近郊町村に私たちは生活しています。

いじめ凍死事件では、学校や教育委員会が性に対して極めて後ろ向きな姿勢を見せ続けました。尾木直樹さんを委員長に置くいじめ問題再調査委員会（以下、再調査委員会）から「これは“性的”いじめの問題である」と明確に指摘されるまで、その性の文脈がかき消されていた当時の街の雰囲気、今でもよく覚えています。

再調査委員会の最終報告に「包括的性教育を進めること」という内容が載り、令和7年度から「包括的性教育を取り入れた取り組み」が各小中学校で始まりしました。最終報告からわずか4カ月後の取り組み開始。教育委員会の担当者が、寝る間も惜しんで準備をしたと聞きました。

ここまで聞くと、旭川市は「CSE先進都市」になったかのように見えますが、実際はそうではありません。「思いやり」に終始する法務局の人権教室。「SRHR」にピンとこない顔をする保健所による性感染症講座。講師予算がついていないため、無料で講師を派遣してくれる旭川医大の派遣講師講座が、希望する学校でのみ実施されるという枠組みになっています。唯一よかったことは、CAPの実施が全学校に入ったこと。その他、独自の教材を使って「生命の安全教育」「いじめ等から人権を守る教育」「SNSの適切な利用に係る学習」を行い、また既存の教科の学習内容を、包括的性教育を参照しながら行うというのが、手引きで示された旭川市の「包括的性教育」の内容です。

しかも、こちらの手引きは各学校長宛ての文書。養護教諭でさえこの手引きの存在を知らされていなかった、あるいは「性」の話だからと養護教諭に丸投げされて他の教員へは共有されていないなど、手引きは現場に行き届いているとは言えません。また、手引きの内容の質にも問題があります。教育委員会に悪意がある訳ではないでしょう。現に先日お会いした担当者の方は、包括的性教育が必要であるという熱い想いを話してくれました。しかし手引きの作成過程でも、現場

での実践の際にも、セクシュアリティや包括的性教育の専門家を入れることが全く考えられていないのです。そこに予算が全く充てられていないことが真に根本的な問題です。「再調査委員会にあれほど要求されては、ポーズとしてはやらねばならない。だが本音のところではやりたくない」という市の姿勢が見え見えます。旭川市長は自民党、議会も自公が過半数を超えているという重たい現実があります。

そんな絶望の街、旭川市とその周辺町村に生活する私たちは、「包括的性教育を子どもたちに!」という想いで、定期的に学習・情報交換会をLINEグループコミュニティで行っています。旭川市だけでなく、美瑛町、富良野市、上富良野町、上川町等周辺町村で頑張る大人も集い、現在20名を超えました。さらに、旭川・上川サークルもこの冬仲間と共に立ち上げ（復活）しました。美瑛町では、教育委員会を主体としつつも、養護教諭の先生方が奔走し、幼稚園から高校までの包括的性教育プランが来年度から始まります。富良野方面では、「せいラボ」という地域の大人向けの連続学習会を、サークルの仲間でもある菊地さん・北村さんが続けてくださっています。私も出張授業のほかに、先述のLINEグループでつながった助産師の仲間たちと、旭川でユースクリニック・カフェの定期開催を始めました。

都道府県別ジェンダーギャップランキング46位の北海道、その一地方である旭川市と周辺町村の現状は決して明るくありません。しかし、ここ数年で人権を守る地域への種まきは確実に広がっています。仲間とつながり合えば、きっとなんだってできる。それぞれの持ち場から、そしてみんなでつながりながら、取り組みを続けていきます。絶望と希望が混ざり合う、旭川市のリアルをお届けいたしました。皆さんの地域のこと、ぜひ聞かせてください。



宮坂舞花
(性教協 旭川・上川サークル)